

文化高知 35

大学は今

一〇年以上もまえから「六七七年問題」ということが言われてきました。それは平成四年に切り変わったわけですが、第二次ベビーブーム世代の大学年齢人口がピークに達するとされる年です。ピークに達することに問題があるのではなく、その後は学齢人口が減るとの危機意識による警鐘です。昨年は昭和六四年＝平成元年で、高校学齢人口のピークだった年です。しかし「六四年問題」というのがあったのでしょうか？ピークに向けて高校増設などの対応が必要とされましたが、高校生減少期への危機感は、私学などを除いて大学ほどの一枚岩的なものは見られませ

ん。
 国公立、短大を含めて大学はなぜこうも「生き残り」が問題になるのでしょうか？第一に今まであまりにも偏差値原理が支配してきたことにより「はいりた大学」とか「はいれる大学」とかいった基準による幅が違って、いずれにしろ偏差値原理に基づく選択の幅と言えます。ところが競争社会、「受験地獄」の谷間にひろがる

この花園、すなわち偏差値体系の中でそれぞれ所を得る、というのどかさ、第二の理由によって消されてしまいません。それは需要と供給の市場原理が導入されることです。人口の絶対数、つ



「白鷺」 和田 薫

まり需要が減少するので、供給側の「生き残り」、「サバイバル」といったことが問題になってまいります。偏差値という一枚岩的な基準を捨てなければどうにもならないということに本當の意味でやっと気づいてきた、といえま

池川 順子

問題はここからです。どこの大学でも長期構想とか将来構想の名のもとに改革に取り組んできました。しかし一般的に言って大学の改革のむつかしさは次の点にあります。第一に革新の必要性について合意を得ることです。適当に太陽も照り雨も降り、その中で教育研究に努めておれば、それ以上の面倒いことは持ち込まないでもらいたいの、とのつぶやきがあれば案外これが困るのです。第二に、革新の必要性の合意にやっと辿りついて、その方法や内容については意見はさまざまということになります。学問分野が違うから方法論も違うし、思想の自由、表現の自由あり、それに自分自身の甲羅と砂に掘る穴を大きくしようとする傾向があります。

「大学の自治」は外部の力に対して使われてきましたが、右のような内部の問題を克服して革新を行う力、そして謙虚に地域の要請に応える努力、いまはそれこそが「大学の自治」の名にふさわしいものと思えます。

(高知女子大学長)

高知の自然に想う

吉田和子

二十六年ぶりに、二月の高知の土を踏んだ。列車を降りると、高知の二月の風は暖かかった。太陽の日差しは春をこえ、初夏のごとくであった。久しぶりに「痛い、高知の太陽の日差し」が身にしみいった。「これが高知の日差しなんだ」と、全身を太陽に向けて、透き徹った空の青さに、時間の空白が吸い込まれていくようであった。

二十六年前、闇雲に東京に憧れた私。前方を太平洋に閉ざされ、後方に四国山脈がたちはだかる、この高知の地形に身動き出来ない圧迫感を感じ、ただひたすら脱出を願った。運よく東京へ脱出できた時の、大地への解放感、今でも鮮明な記憶として焼きついている。

しかし、二十六年経た今、私はこの高知の地形と自然が育むものを微かであると感じとりつつある。

父性のごとく私たちはだかる四国山脈。山にさえぎられ、その向こうの世界が見えないがゆえに、自前の夢をたくましく描くことができた。

母性のごとく包み込む太平洋。地平線の彼方、夢の世界が幻のごとく浮かんで沈み、自前のロマンをつむぎ出してくれた。

高知の地形は自然は、多くの若者たちに、脱出願望をかきたて、アイ

デンティティ形成に一役買ってきたといえないだろうか。

三十年ぶりに会った中学時代の友人にこのことを語ると、友人いわく「そら、おまん、ちがうぜ。脱出願望の要因は、青年期特有の親離れ現象と、高知経済の貧しさぜよ。おまんもそうやったやいか。とつと昔から今も、それは変わってないぜよ」と力説。

いわれてみれば、高知に勤めるころなく、出稼ぎ教師生活を二十二年目終わり二十三年目を迎えた。友人のいう通りかもしれない。

でも……と私は思う。高知の山と川と海と田畑。この自然は若者の心と身体を決して貧しくはしてこなかったのではないかと。

生活の貧しさをつくったのは、大人の政治経済の問題であろう。

高知の町々を車で走ると、山肌が崩れんばかりの姿で放置されているところが、何方所か目に飛び込んできた。魚釣りを楽しんだ浦戸湾は汚れがひどく、いたるところが埋め立てられていた。菜の花が咲き、れんげ畑が続いていた潮江から孕の田畑は、家並みがぎっしりである。

そこに起きている現象は、東京の人間生活崩壊現象と同質のミニ版のように映り、悲しさが身体を貫いて

いく。

今、私たちは何をもって「豊かな生活」と考えたらいいのだろうか。物や金があれば豊かといえるのだろうか。豊かさの価値基準が問われている時代である。

高知は高知なりのアイデンティティを鮮明にした。生活づくり・町づくりをして欲しい。個性のある豊かな人間生活づくりは、この高知の地形・自然を視野に入れずして考え語ることではできないように私には思える。

物・金だけでは、人間の豊かなハートが感じられる生活は作れない。個性的な高知の地形・自然との共生・交流を軸にした豊かさをどう育むのか、そこに土佐人のハートのある個性的生き方を見出していく一つのキーポイントがあると、私には思える。

自然を壊すのではなく、さらに豊かに育み、多様な自然との個性的な共生生活づくりができた時、他県の人たちは、太平洋と四国山脈に立ちただかられた向こうの地へ高知に夢とロマンをかきたてられるに違いない。その日がくることを、私は東京で夢みつUターン計画を少しずつ実行してみたい、と二月の高知の空に語りかけたものである。

(都立第四商業高等学校教諭)

伝承と創造

花柳昌延

「口伝は師匠にあり、稽古は花鳥風月にあり」という言葉があります。伝承芸に携わる者として、伝えてゆくという事と、創るという事、この二つが今、日々の大きな目標となって私をとらえております。古典芸能を教えてゆく過程において、代々正確に伝えられねばならぬ事があり、指導者としてどれだけのものを会得し、次の時代に残せるかという事が問題となってきます。

日本舞踊の人口も年々増加し指導者も多くなった反面、一部ではありますが極端な言い方をすれば、変形の分子が分裂を起こしてゆくかのよう、間違った伝えられ方を受けている人達もあります。

高知県日本舞踊協会の設立は、このような危機感を起点として、地元で伝承されている舞踊に中央からの新風を吹き込み、指導者の研修・舞踊家の技術向上という目的で結集さ

れています。今まで師弟という縦のつながりだけであった世界に横のつながりを得、各流派同じ考えを持つ人達が手を組んで、正しい古典の継承とこの時代に生きる舞踊の育成に立ち上がる力強さを、この協会の歩みと共に実感しております。

私事ですが、この八月二十六日に「師籍三十五年記念舞踊会」を開かせて頂く準備を今進めております。私自身の信念で、熱く、厳しく、と

過したこの三十五年ですが、果して納得のゆく根を張り、発芽、開花を予想できるか、いまだに未知数というところを恥ずかしい限りです。若い人達はすぐ才能の有無、感性の有無を問う「この踊りはどういう気持ちで踊ればよいのですか」と聞きま

最も大切な要素である事を知ってほしいと思います。個人差はあっても手ほどきから何年間は無表情、無感情で体の動きの習得を黙々とできる位のエネルギーを持つ、その辛抱により「素養」のあるなしが決まると

思います。無心の習得の上こそ独自の創造性の開花を期待出来ます。その為にすべて自然体を学ぶこと、魚が身をかえすように、鳥がはばたくように、無駄をはぶいた自然の流れを知り、さまざまな花鳥風月の輝き、動き、それに伴う感動が五体の動きとなり自然に表現出来るようになりたいものです。観る人の心に伝わる表現をするためには、一つ一つに力強さの裏打ちがあり、ぬめりを除いたふくらみの中のはぎれよさ、そういう技術の方向に向けて指導して行きたいと思っております。

過去にその時代の人達の血を湧かせた芸能も現代の目まぐるしさの中

で若者達から見離されがちですが、新しい感覚を持って、古風な味をより古風に保ち、大切に表現してゆくところに、限られた中の創造の世界が輝きを持ち始めるように思います。色々な制約の中から力強く生まれ、くる、時代に即応した斬新な息吹きを、我が国古来の音楽に合わせ、着物という体にただ添わしただけの布をまとってたたらを踏んだかの阿國歌舞伎のように、新鮮な心を失わずに、観る人の心の中で生き続けるような舞踊、日本舞踊もそうでなくてはならないと思います。

画一化された化粧、衣装の内から外へ滲み出すとか吹き出すというかそのエネルギーを蓄えることが日本舞踊の基礎であり、その制約から出発して独自の世界をつくり出してゆくことが創造ということなのだと思えます。

今、私は何十年もかかって自分の蓄えて来たものを総て注ぎ込みたい、もつと吸収してくれ、してくれと願いながら、弟子に稽古を付けており分が見えてくる自分を創ってゆくことが出来るからです。こうして、伝える、創る、を繰り返しながら、私の道標に向かつての一日一日を大切に生きたいと思っております。

(高知県日本舞踊協会会長)

土佐和紙を漉く

高野秀見

ここは、紙漉きの本場やった。わしらが子どもの時分にはどっこも家に格子戸の紙屋があった。紙屋というのは紙漉きの仕事をしゅうところのこと、仕事場といわいで紙屋というた。戸を開けたらいなながら人が入ってこれるといのは危ないきに、盗人らあがそのまま入ってこれんように格子戸を入れちよった。

この辺りで一番多かつたのは典具帖紙やつたねえ。その前には、今漉きゆうような表具の紙とか障子紙とか傘紙とかいう紙をずっと漉きよつたねえ。典具帖紙というのはタイプライター用の原紙でヨーロッパに全部出よつたけど、第二次世界大戦が始まつた時に結局輸出がストップした。それで、今度終戦を迎えても元の需要は戻って来ざつたねえ。

わしは昭和十二年に小学の高等というが卒業して、簿記ばあはいちよいたらよかろうと思うて土佐簿記へ通うた。お城の西つかわに前の営

経験じゃねえ。習うばあでは自分の氣にいった道具の仕上げがでせん。こやつたらえい、あやつたらえいということ、やりゆう中に自然に覚える。家のおばあさんらあもたいて紙を漉いた人よね。今九十六歳じゃが、耳も聞こえるし目も見える。昔の人はよう漉いちゆうぞね。紙漉いて身体が悪かつたということはないみたいじゃねえ。子どもが六人も七人もいてから、紙漉いて来ちゆうきねえ。紙を漉く者は立てることには慣れちゆう。立ち仕事じゃきに。紙を漉き出したら休まれん。朝、漉き始めたらもうずっと連続、途中で休むとすぶねの中のねりが消えていって、原料がどんだん下の方へ沈んでいく、だから漉き出したら休んだらいかん。紙は夏より冬でできる紙がえい。紙を漉くにはねりを入れる。繊維をはりつけるための糊じゃのうて、水に粘りを与えて繊維の分散を良くするためののり、ふねの中へいれて混ぜくりよつたら徐々に消えて粘りがなくなる。何によつてなくなるかという、振動を与えても、温度が高うても、金属イオンが入ってもなくなる。夏場は温度が高いから消えていく。入れちゃう原料が早う沈み出すきに漉く時にしよつちゆうのりを足してやらんといかん。ふねの中の

林局と並んであつたがねえ。一年ばあ、そこへ行つたねえ。そんで十四年頃から稽古したろうと思う。小役をしたり、紙漉いたりすることを。小役というのは、原料を炊いたり、晒したり、洗うたり、紙に漉ける原料を作るまでの下ごしらえをする役でねえ。そう、二年ばあ小役をしたろうねえ。それから典具を漉き始めた。上手な人に習うてねえ。野口虎一という高知県でも有名な人やつた。その人にこやつて漉かないかんいうてぎつちり手にとつて教えてもらった。それから、すぶねをもらうまで半年以上かかつたろうねえ。やつぱり習うより慣れるで、人の漉きゆうところを見たり、間があつたらちよいと桁を握つてみたりしよつた。漉き出してからも中々えい紙はでせん。やつぱりベテランになるには四、五年ばあはやらんと。少のうても三年ばあは甲紙はできざつたらうねえ。甲紙、乙紙、丙紙とあつて、

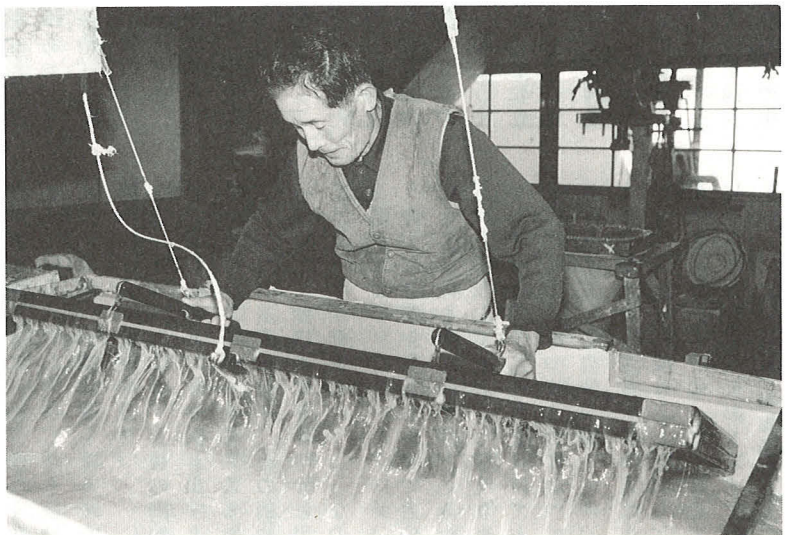
条件が一定でないと同じ紙がでせん。それに漉いた紙に細菌が発生して、紙が腐りやすくなる。冬はのりが消えにくいからずーっと漉き続けられる。それに温度が低いから細菌も発生しにくい。そういう理由で紙は寒漉きというて冬のものえい。漉くだけじゃなく、自分で選別もせないかざつた。紙を見いでも、押さえたたら手の感触で大体のことは判る。へち向いちよつたち、手先で厚さが判る位にならんといかん。シュッと押さえて膝の上へ持つてきて、バラバラバラと数えるがねえ。五十枚と思うたら丁度押さえちゆうか、違うても一、二枚で何枚も違いやせん。まあ、それだけになつてくるねえ。あれだけは自分でもやつぱり大したもんじゃと思うねえ。薄う

紙の値段がちごうてる。わしの家にいたすき手の野口さんが漉いた紙は八分二厘から八分五厘の甲紙ばかりやつた。ほんで家のおやじもかなり儲けたぞね。一週間に一回か二週間に一回選別に行つてねえ、戻りに肉をどつさりこうてきて食べて、またあくる日は仕事というような感じで、昔の人はようお客もしたぜよ。

質を見ること、紗をつけること、これが典具の一番大事な基本じやきねえ。紗が質からすかんようにべつたりひつつくように付けな

押さえたたら薄いなりに厚さが判るきにねえ。勘というたらえいろうかねえ。伊野地区は典具帖紙が一番多かつたねえ。障子は高岡が多うて、こは余りやらざつた。長い伝統があるし、薄いものを漉かしたらこはピカ一やねえ。これは薄いきやりにくいじゃ言わんきに。紙付けさんも典具をやつちゆうきねえ。今漉きゆうもんはみんなあ典具の技術を持つちゆうきねえ。現在漉きゆう人が十二人。その中、八人が九人が典具。典具は紙でも一番難しい。よその紙は典具漉きにはみな漉ける。けんど他の紙漉きに典具を漉けるかというところは問題。漉かしたら「こりやいかん」ゆうて尻尾を巻く。昭和二十三、四年頃、典具の組合ができて氏原一郎さんの弟の進さんという人が褒めてくれた。「高野さんよう、おまん、優秀賞じやが」いうて。あの頃はすぶねが二百や三百いわんじゃなかつたらうか。

今はもう、品評会もない。昔は典具だけでも何十軒ゆうて漉きよつたから、典具ばかり集めて品評会、障子ばかり集めて品評会いうてやりよつた。今は品評会やるいうても相手がおらん。典具を漉くものを何とか残さんといかんという話が出て、町の方でも



紙を漉く

は伸びる、竹簧はヒゴが乾いたら細うなる、細うなつたら編んであるから簧全体が伸んでしまふ。今度水へ浸けたらヒゴが太り、簧が縮まる。簧は縮めるだけ縮めて紗は逆にもう伸びんぜよという状態まで伸ばしてそれで載せる。付け方が悪かつたら簧と紗の間に隙間ができて、紙がかしなものになってくる。こういうことはすべて身体で覚えんといかん。



乾燥させる

補助をもううて後継者を育てゆうがそこそこ漉けるようになつちゆう。今までの仕事を続けてきて、嬉しいことめつそうない、辛いことばつかりして来たねえ。やつぱり若い時には、我が仕事として、どんなにうるさいことでもうるさいとは思わざつたねえ。思うたらできざつたらうねえ。自分にあてがわれた仕事や思うて、とにかくやらないかん、漉きさえすれば飯が食えると思うて。お陰で知事の産業功労賞もろうたし、伝統産業で四国通産局長賞も頂いた。わしが止めたら紙漉きも止まる。今、手漉きの紙で、機械でできんという紙はない、そこに手漉きの宿命というものがあるけん、手で漉いた紙は、それなりの暖かさがあつてえいねえ。機械にはない何とも言えんほのほのとしたものがある。何とか続いて欲しいと思うねえ。(談)

(伝統工芸士)

2 ドイツでの生活

中島 亨

大阪空港で預けたスーツケースが最終目的地まで着かず慌てたり(翌日到着)、電力会社への手続きが遅れたためマンション入居日に電気が間に合わず、三日間暗やみのなかで過ごさなければならなかったり、といったハプニング続きのスタートでしたが、今回は十ヶ月の間に体験したドイツでの生活、とくに日本との生活習慣の違いなどについてお伝えしようと思います。

・天候

土地の人々はデトモルトのことをもじって「ウェットモルト」とユーモラスに言っていました。たしかに雨や霧が多く、一日中晴天が続くという日はそれ程多くありませんでした。デトモルトはフライブルクに次いで天候の悪い町だそうです。雨が降っても傘などさす人は少なく、ほとんどの人がぬれて歩いていました。どしゃ降りになることはあまりありませんし、室内が乾燥している

ぜいたくな話で、シャワーだけしかないアパートも多く、日本人留学生のなかには風呂にはいりたがっていた学生も結構いました。ドイツ人は浴槽にはめったにはいらず、普通はシャワーのみ、場合によっては洗面所で体を拭くだけということもあるようです。

・営業時間

むこうで不便を感じていたことの一つに、買い物をする日や時間をいつも気にしていなければならぬ、ということがありました。日本ですと、土曜日の午後や日曜、祭日はお店にとってもっとも書き入れ時です

北海道石狩平野の北部に、樺戸郡浦臼町という町がある。ここは明治26年と27年にかけて、武市安哉が多くの高知県人と共に入植し、千古斧鉞の原始林を伐り開き、香りの高い文化を築いたところである。安哉は敬虔なキリスト教信者で、新しい理想郷の建設を志し、衆議院議員の要職を捨てて開拓の先達となった。

この地は、今でこそ治山治水が行き届いているが、当時は石狩川が蛇行し、洪水に見舞われることが多く、学校に通う子ども達が突然の猛吹雪に遭って命を落とした話なども語り継がれている。

龍馬の甥、坂本直寛も明治31年に一家を挙げてこの地に移り住み、苦難の中で

のですぐ乾くからかも知れません。

それにしても冬の暗さは相当なものでした。ドイツ紹介のある本に、留学生が希望に胸をふくらませ意気揚々とドイツに渡るけれど、一年目の冬、暗さにめいってしまつて出ばなをくじかれる、といったようなことが書いてありましたが、まさにそのとおりで、日照時間が短かいうえ、お天道様はなかなか拝めずゆううつな日々が続きました。ドイツ人が太陽に憧れる気持が十分に理解できません。

寒さはそれ程でもなく、二回大雪に見舞われた他は霜が降りた程度で、高知の最も冷え込む時期と同じ位だったでしょう。珍らしいことですが、クリスマスはホワイイトクリスマスにはなりません。

・あいさつ

われわれ日本人はおじぎであいさつをしますが、ドイツ人は老若男女、

もちろん子供も握手であいさつをし

ます。握手はドイツ人の祖先であるゲルマン人が手に武器をもつていない証拠を示し合うためにした風習のなごりだそうで、その際、相手の目を見るのが大切で、私など当初てれくさくて、また見合いが長いとすぐ負けてしまつて目をそらしたものです。あいさつが終るまでお互いの手と目をはなさないのが礼儀です。教室に七、八人の学生がいる場合でも、先生はレッスンの始めと終りに必ず一人一人と握手をしておられました。ドイツ人は会ったとき、別れるとき、一日に何度も握手をします。

・住まい

西ドイツの面積は、本州と四国をあわせた位の大きさで、人口は約六〇〇〇万。しかし、人間の住める土地が日本の約七倍もあるため各戸の空間は広く、住宅は密集していません。家を建てる時、町全体の調和を考えて、高さや大きさをそろえて造るように法律で決めているのだそうです。そのためドイツ中どの町へ行っても家並みは似たり寄ったりです。どの家も庭も手入れが行き届き、とくに窓はいつもピカピカに磨かれ、美しい花が実にセンスよく飾られていました。玄関の土間や入り口を水洗いしているところをよく

が、ドイツではこれらの日は営業してはならない法律になっているように休みです。ですから、土曜日の午前中までに食料を補給しておかないと、月曜日の朝まで食事にありつけない可能性もあり得るわけです。また、平日の午後一時から三時まで、スーパーやデパート以外の店は昼休みをとっているところが多く、そのことをうっかり忘れていて出直したことも数回ありました。お客さんがいても閉店時間になるとかまわずシャッターを下ろします。

・音楽会

ドイツ人の普段の服装は一般に地

味で質素な感じがしますが、音楽会のときは男女ともドレスアップしてきます。とくに女性は派手で、ファッションショーのような雰囲気といったオーバーではありません。時には目のやり場に困るほど大胆なデザインドレスを装っている中高年女性もいました。休憩時間のロビーは社交場と化し、ゼクト(ジャンペン)やワインを飲みながら歓談している光景はとても優雅で、日本にはないこうした習慣を大変うらやましく思ったことでした。

ところで、音楽会場で子どもの姿を見ることはほとんどありません。

開拓者の中心となって活躍した。直寛は、武市安哉、前田駒次らと共に自由民権運動の志士で、奇しくもこの三人がそれぞれの立場で浦臼の地に入植している。

直寛は後に、旭川市の日本基督協会の牧師となり、その系譜は札幌を初め北海道のキリスト教信仰に今尚深い影響を及ぼしている。駒次は、後に直寛らが開いた北見の北光社に移り、その地から北海道議会議員に出、更に議長となり、北海道の発展に大きな功績を残している。

私は先日、この地の高知県人会の人々の集まりに招かれて、初めてここを訪れた。酒を酌み交わしての話も楽しかったが、何よりも、落ち着いた自然、その中

に点在する農家の佇まいを眺めている内に、言い知れぬ感動に打たれた。この地を開いた多くの人達の心、魂がそこに生きてるように思えたからである。

土佐からもたらされた文化が、北海道の風雪、自然の中に、人々の血と汗によって成熟した、というように実感した。

北海道には、沢山の土佐人が諸々の地に入植しており、それらの地に先人達が何を残したかは、残念ながら私の力では解明できないが、例えそれが小さくとも、それなりの影響が続いていると思う。

浦臼の人達は是非一度皆で高知を訪ねたいと言っている。それが一日も早く実現することを祈念しつつ。(弁護士)



(注) ヴィーダーゼーエンは「また、お会いしましょう」という日常語。

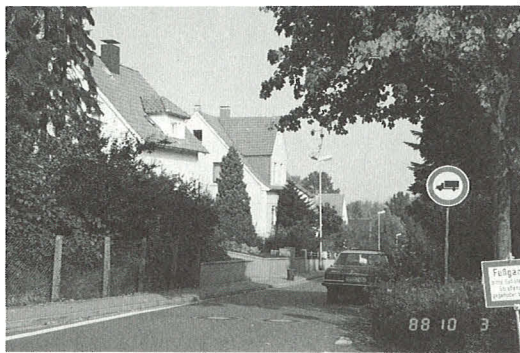
大人ばかり、それも大半は夫婦で来ています。夫婦で外出する場合、十二歳以下の子どもには家の鍵を持たせてはならず、子どもだけで留守番をさせてもいけない法律になっているとのことです。必ずベビーシッターか誰かに面倒をみてもらわなければならないとのことでした。

(高知大学教育学部教授)

北国を開拓した土佐の人達

北海道高知県人会長

山本隼雄



ドイツの家並み

開館した自由民権記念館

—その意義と諸機能—

関田 英里

高知市制百周年記念の年も三月末日で終った。その日、記念事業のメモリアル施設、新たな百年へのシンボル施設としての高知市立自由民権記念館が落成し、翌四月一日に開館した。高知市民・県民が久しく待望し、建設期成会の運動が始まってからでも七年余になる、その記念館が完成・開館したのだから、まことに喜びにたえない。

昨年四月一日、市制百周年を迎えた都市は全国で三十九都市に及ぶそのうちであるが、高知市ほど有意義に百周年を祝い、新しい百年に向けてスタートしたところは、他にはないのではなからうか。一〇一人委員会を中心に、市民主体で多くの記念事業が行われ、参加した市民は延べ二七五万人にも達したということなど、他の市には類がなからうし、記念施設として市民・県民が全国に誇ることのできる立派な自由民権記念館をつくったことなど、「自由は土佐の山間より」の言葉どおり自由民権運

動の発祥地であり、その伝統がいまに脈々と生きている高知市だからこそできたことである。

私事にわたって恐縮だが、私の祖母の弟土居純橋は同じ大浦村の武市安哉のもとでたまたかた自由党の闘士で、三大事件建白では保安条例で帝都三里外に追放された人物だった。その大叔父から、中学生の私は民権運動にかかわる話をいろいろ聞いた。戦後、その大叔父の盟友だった前田岩吉翁を識った。翁は保安条例の退去命令を拒否して片岡健吉らとともに石川島の監獄に投ぜられた人。私は翁から当時の回想とともに、戦後政治に対する老いてなお衰えぬ慷慨の弁を聴いて感激し、一九五三年（昭和二八年）逝去された時には追悼の文を新聞に寄稿したことがある。そんなこともあって私は、自由民権運動に強い関心を持ち続け、大学の講義でもしばしば触れてきたし、建設期成会の運動にもかかわってきた。そして思いもかけず、開館とともに



1Fの開放的なアトリウム空間

建物は、入るとすぐ感じることでだが、開放的で明るいところが「自由」の館にふさわしい。蔵造り風の四つの棟の屋根に「自由の灯」がともされる夜景もまたすばらしい。

常設展示は、準備事務所スタッフが専門家の助言も得ながら精根こめて仕上げたものだけに、中味の濃いものである。われわれの父祖が自由と民主主義を求めて闘った歴史が年次を追ってよく分る。板垣退助・植枝盛等々のリーダーや理論等の大きな役割を明らかにしながらも、彼らを「英雄」にしてしまわず、彼らを支えているいろいろの階層の人々の動きをも照らし出し、歴史の真の主人公は人民大衆だということが感じとれるようになってきている。「自由」と大書した旗や結社名を書いた旗を押し立てて、自由大懇親会に向う庶民の群像など感動的である。

また、土佐の先駆的かつ指導的な活動が、全国的な運動の発展のなかに位置づけられており、世界的な背景も感じとれる。

自由民権期は「すべての人民が生きていきと要求し、活動した時代」、社会、日本はこうあるべきだということが民衆レベルで語られていた近代日本の壮大な青春期だった。

自由民権記念館は第一に、自由民権運動を中心とする歴史系博物館で

ある。「生きて奴隷の民たらんよりは死して自由の鬼たらん」の言葉のように、自由と人権と民主主義のために命をも賭して闘った父祖の歴史を、小・中学生を含め、県民が身近なものとして学ぶことのできる施設でなければならぬ。自由民権の歴史に学び、その伝統に誇りをもち、その精神を明日に向けて生かすことは、高知のみならず日本にとって、極めて大切なことである。時あたかも、世界的に自由と民主主義

と平和が問われており、いま開館したことはまことに意義深い。観光客にも高知へ来るからには、是非、立ち寄ってもらいたいと思う。

記念館には、自由民権関係の資料・文献を可能な限り収集し、来館者の閲覧に供する図書館的機能も期待されていて、それに応える責任もある。幸い、高知市民図書館がこの二十年苦心収集してきた数万点の土佐近代資料があり、自由民権関係のものは記念館に移管されることになっている。専門研究者には、ここだけにしかない貴重資料も閲覧に供し、研究の発展に資さなければならぬ。

つい先日、植木枝盛の手紙が発見されて話題になったが、埋もれた



2F常設展示室



2F常設展示室（壁面）

史料の発掘も重要な課題である。運動の基盤・背景となった社会・経緯・文化に関する庶民資料なども収集したいと思っている。これらの点については、民権家の縁故者のみならず、郷土の歴史に関心を持つすべての人々の協力を得たい。

高知の記念館と類似の施設としては、すでに福島県三春町の自由民権記念館、東京町田市の自由民権資料館があるが、これらとのネットワークも必要だし、県内や全国各地の図書館・資料館との連携もはからなければならぬ。

自由民権のメッカだった土佐にできた記念館であるからには、地域の施設であるだけでなく、自由民権の学習・研究の全国的なセンターにしたいと思う。土佐の立志社へ青年民権家が全国から来り学んだように、自由民権を研究する者は、まず高知市立自由民権記念館へ、ということにしたいものである。

自由民権記念館はまた、地域の文化的な催しや活動の場としての文化施設の機能もあわせもつことになっていて、そのためのホール・ギャラリー・研修室等も備えている。一階のアトリウムをお茶を飲みながらの語りあいの場として気軽に利用され



2F民権座（映像展示室）

るのも結構である。この面でも館は早く市民生活の中で定着した存在にならなければ、と思っている。

自由民権記念館の目的に沿い、その諸機能を可能な限り発揮できるように、少い人員ながら館員一同せいっぱいがんばって大方のご期待に応えるつもりである。ご来館のうえ、ご助言やご要望等を賜りたい。

〔附記〕館の収蔵庫・特別収蔵庫の乾燥と、文献・資料の高知市民図書館からの移管作業に日数を要するため、館の図書館的機能の本格的な稼働は、今後秋以降になることをお断りしておきたい。

（高知市立自由民権記念館長）

独自のものを

第6回を迎えた都市美デザイン賞

山本忠司

この賞が回を重ねるにつれて、高知の文化をつくる大きなモニュメントになっていくんだなということを実感として強く感じます。

少し、気になることを申し上げるかと思いますが、選考する立場に立って、どういう観点でものを見たらよいかということがあります。私は文化というのは独自性がないと駄目だ、真似事をやったんでは価値はそれほどないという持論をずっと持ち続けています。

それと、高知という都市環境の中で文化をつくっている訳だから、都市環境との調和という観点が必要でこの二つは堅持して選考に当たっているつもりです。いつまでゲスト選考委員をお手伝いできるかわかりませんが、こうした持論を元に私の考えを述べてみたいと思います。

今回の選考を通して、安藤流の打ちっぱなしコンクリートを、若い人が息せききって追っ掛けているとい

るとい印象を受けました。いいものができれば、それに啓発され、インスピレーションを受けて造っていくという事はいいことです。ただ安藤を追っ掛けていくことは止めて欲しい。追っ掛けるとそれ以上のものにはなれない。追っ掛けるのを止めて、もう少し、独自のものを打ち出されたらよいと思います。

私も香川県庁に長くいて、その当時、丹下健三が県庁舎を造っていましたが、設計から現場までずっとお付き合いをし、その後、丹下健三のフォルムが身について仕様がなかった、何とかそれを振り切って、違うものをつくりたいという憧れがありました。良いものに影響されても、それを振り切って独自のものを創ると言うことの尊さを強調したいのです。

今回の選考で、中教院という打ち放しコンクリートの非常にきれいなまとまった建物を見せてもらいま

た。うまいなと思いました。その建物の裏側に小さな流れがあつて、そのせせらぎの横に素晴らしい石組みがあり、むしろその石組みに圧倒されてしまいました。石の膨らみ、色の変化等々、これは素晴らしい文化が高知にはあるなと思ひ、むしろ、そちらの方に圧倒されてしまったのです。

どのような基準で選考しているかとのご指摘に関しては、それが街の中に溶け込んでいようと、あるコントラストをもたらすものであろうと次元の高いもの、水準の高いもの、デザインのレベルの高いものでなくてはならないと考えます。低俗なもの、エネルギーをかけないもの、文化的次元の低いものは、都市構成の要素としては弱いと思うのです。また、それが、街の中で非常に違和感を持って見られるというものでも困る訳です。

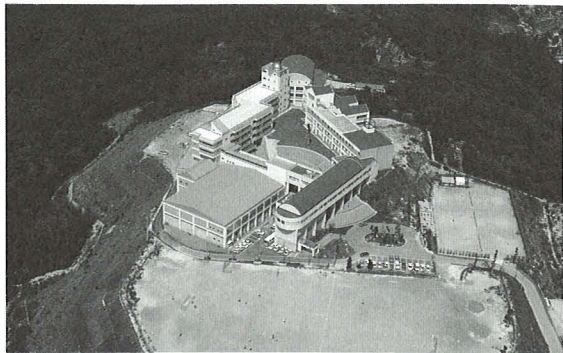
ただ、パリの街にポンピドゥーセン

ターができた時、パリの市民から轟々たる非難があつたが、それがいまやパリの観光の目玉になっている。都市の中に馴染ませていくのが良いのか、それともキラッとしたものを投入してゆくのが良いのか、これは一番論じられなければならない問題だと考えています。その辺が非常にむずかしいところである訳です。

今回、三つの作品が入選と決まった訳ですが、土佐塾中・高等学校は非常にスケール感の大きいものです。特に一階のエントランスのピロティというか、あの空間を三階分ぶち抜いてそれを内部の中庭に導入させて、その中庭を観覧席、野外の催しに使う広場のように考え、周りの構成にしても全体のレベルはかなり高いものを持っていると感じました。

都市美という点で、市域の中で見えるとか見えないとかの議論もありますが私は高知市の市域の中で、文化の構成の要素の一つとして考えた方がよいと思います。市内から仮に見えなくても、高知市を構成する文化の大きな要素になれば、結局それは高知の都市美となるわけで、そういった目で見ていいんではないかと思っています。ただ、生徒達の動線がどう動いているか、巨大な下降と内庭を結ぶ空間と生徒の動線がどのようになっているか、限られた時間の中

では掴みきれない点もあります。それはそれとして、多くの意見で入選と決まりました。私も賛成でございます。



土佐塾中・高等学校校舎と体育館

次に新月橋、これは公共があそこまでよくやったと敬服しました。私も前に役所にいたからよく分るんですが、普通は橋を架けて車がビュッと通ったらそれでいいんじゃないかということになるんですが、橋を小公園というか、そこで休んで月を眺めたり、そういう空間まで織り込んで、高知の文化の厚みというか、あのアイデアを出されて、財源を投入して来られたそのご努力に敬意を表しております。



新月橋

デザインについて醜悪ではないかという意見もあるようですが、私は決して醜悪だとは思いません。円形のステンレスの大きなリングと小さなリングとがあつて、大きさでのバランスをとらせながら、全体をまとめている、デザインそのものはまあまあで、ちょっとコンクリートとステンレスの冷たさはもうすこし何とかならないかとは思いますが。普通、土木技術者が橋を架けるとい場合、単純に通行の用しか考えない、それをもうちょっと多次元に橋を扱ってみようという考え方はこれからの行政に非常に必要じゃないかと思うんです。単純思考だけでなく複合思考というか、そのような扱い方もこれからどんどんやってほしいと思いま

す。

このほか今回、推薦された中に追手筋のヤイロチョウの信号機がありました。県のサイドで、アイデアをこらして、道路にデザインを持ち込み、街を楽しく豊かにしようというご努力は高く評価いたしたいと思ひます。

三つ目の吉村邸については、コンクリートの打ち放しは、栗田邸、中教院、そして吉村邸と三つありましたが、それぞれに力作だと思ひます。安藤忠雄のこを出して申し訳ないんですけれども、みなさんが非常に頑張っておられることには敬意を表します。

高知の若い人達がここまでおやりになっていく、香川の若者は駄目じゃないかという気持ちで拝見させていただきます。最後の吉村邸が一番よかったと思ひます。

特に、高知の雨をうまくデザインに誘導している点が素晴らしい。普通、樋をすれば内樋にするか外樋にするかしかないんですけども、それを積極的にデザインの要素に取り入れて、カーブの造り方もなかなか上手い、彫刻家裸足だなど



吉村邸

思ったんです。曲線もきれいだし、下の受け皿を滝のようにして焼物をかなり気を使って作り込んでいます、苦労の跡を見せてもらいました。

打ち放しコンクリートにポリウレタンをかなりかけておりますから、他の二作品とはちょっとニュアンスは違うんですけれども、この建築は二棟になっている真ん中の所を樋のデザインで上手くまとめている。パチンコメタルが後ろにあつて、その扱いも悪くないし、都市美の中でどう位置づけるかとなると、これは投入型の部類になるかと思ひます。樋のデザインが非常に上手い、そういうデザインの要素に組み入れたアイデアというか、打ち出し方に敬意を表したいと思ひます。(談)

(建築家・新日本建築家協会四国支部長・高知市都市美デザイン賞ゲスト選考委員)

「高知を撮る」に想う

寺田 正

高知市文化振興事業団が公募している、高知の映像コンテスト「写真展・高知を撮る」も、今年は六回目を迎えました。

作品の募集要項ではこう呼び掛けています。

『この（写真展・高知を撮る）は、過去から現在に至るまでの高知県内の出来事や風景、暮らしなどを写真でふりかえることによって、高知のいろいろな表情を知ろうというものです。』

また、明治、大正、戦前、戦後の高知を記録した写真をお持ちの方もぜひ応募ください。』

私は縁あって、第一回からこれの審査に当たってきましたが、募集の呼び掛けは、一貫してこのようなものであったと記憶しています。

ところが、今までに応募された写真は、一般のコンテストとあまり変わらない単なる鑑賞的なものが多かったように思います。

応募者の立場から考えると、使用目的や対象物がはっきりせず「高知のいろいろな表情」を知ろうというだけの抽象的な注文では、一般のコン

テスト風な写真となることも致し方なかったと思われまします。

これは主催者側としても同様で、応募写真を見た結果、具体的な内容の要求や注文がはっきりしてきたと言えらると思います。

これらの回を重ね、審査結果の発表を見たことなどから、事後の撮影や古いネガからの選別にも、全般的に理解が深くなってきたことがはっきりとわかります。

このコンテストの趣旨が浸透し、今後に明るい期待がもてることを喜びたいと思います。

さて、すでにご承知のとおり、昨年度は地方自治法施行百周年と「ふるさと創生資金」として、全国各市町村に一律一億円交付のあったことが重なり、いろいろな記念行事が各地で盛大に挙行されました。

特に一億円の使途については、まず取りあえず純金のカツオを作るとか、金塊を作るとか、万円札束に現金化して住民に公開したとか、誠に微笑ましい話題が沢山あったようです。

高知市では、市制百周年記念事業のために「一〇一人委員会」が結成され、綿密に計画し、市民主導で実に多彩な事業が盛大に実行されました。これとは別に、従来行われてきた民間の諸行事で、この記念事業に

積極的に参加し、周年記念事業を盛り上げたものもあります。

これらの事業が、委員、職員、その他関係者の努力で、盛会裡に完遂できたことは誠に同慶の至りです。

この絵になる多彩な行事風景の記録写真を、私は、今回の第六回高知の映像コンテスト「高知を撮る」展に期待していたのですが、これは完全にアウトでした。

なぜだったのでしょうか？
案ずるに。

参加した人、見た人、撮った人はそれぞれ多かつたと思います。それが却って、コンテスト効果が少ないと、逆判断された結果ではないかとも思われます。

もっと大局的な見地に立つて、世紀の大記録を残すつもりで多くの市民、県民の方々に応募し、発表して欲しかったと思います。

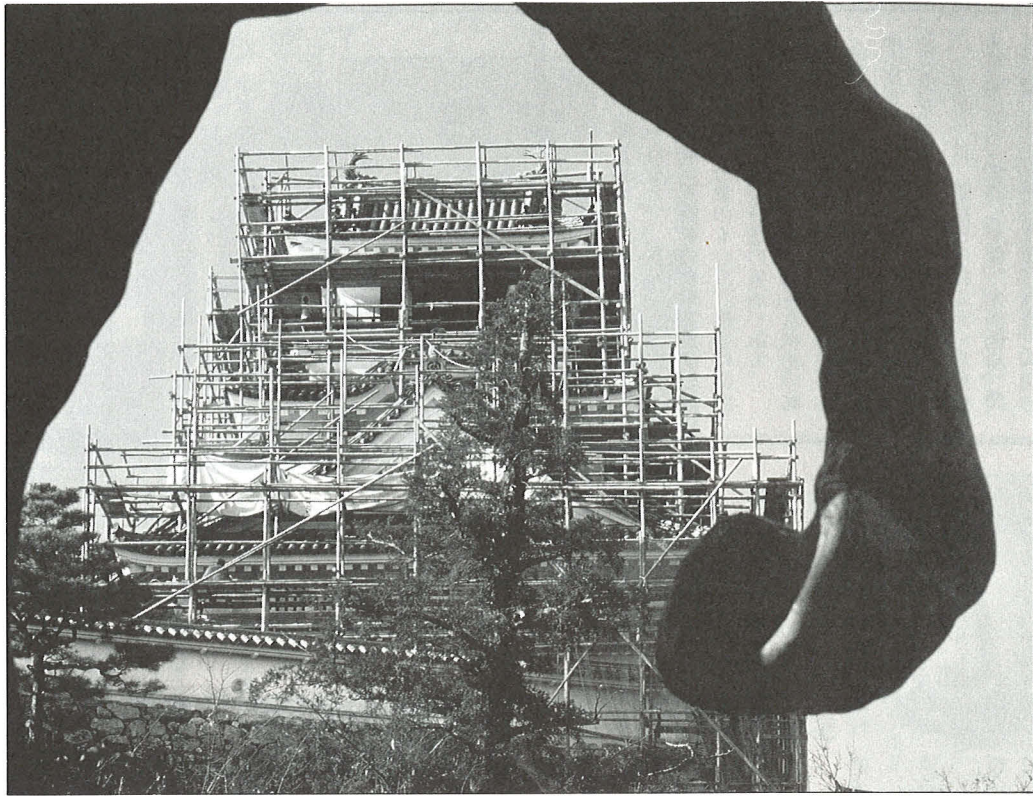
もつとも、主催者、関係者側は、それぞれの立場から立派な記録を残しているでしょう。それはそれで結構です。ただ、一般市民が、世紀の大記念行事をどう受け止めたかの記録は、なんとか残して置かねばなるまいと考えます。

「一〇一人委員会」が解散された現在は、高知市文化振興事業団に善処をお願いしたいと思います。

（高知の映像コンテスト選考委員）

馬年修復

細木 健次郎



第6回高知の映像コンテスト「高知を撮る」 特選

即席ラーメンが誕生して三十年が過ぎた。はじめは子どものおやつくらいにしか考えられず、手抜き食品の代名詞のようにいわれたが、今や年間四十五億食も消費されている。

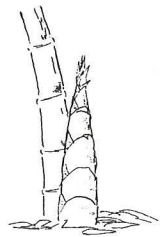
時代とともに日本人の食生活がどんどん変化していく。だが日本人ほとんどでも食べる民族はいないそうだ。大袈裟にいえば、世界中の人々が食べているものすべてを食っているのである。

摂取している食品数が多いというだけでなく、西洋料理だの中華料理、ロシア料理、メキシコ料理、スペイン料理、フランス料理と、何でも腹に入れてしまう世界一の雑食民族である。

香辛料にしても、お国柄によって使い方がちがいで、ある民族の場合は「シヨウ」だけしか使わないといつのに、日本の場合は、「シヨウ」はもちろん「シヨウガ」「ワサビ」「トウガラシ」「サンショウ」など多様である。そしてそれを少しも不自然と思っていない。

ウニ、ナマコ、タコ、ゴボウ、コン

現代風俗を考える〈7〉



旬の味

ニヤクと、ほんとに何でも食う。ゴボウとコンニヤクを食つのは、世界中で日本人だけだといつ。

そんな日本人がいま「旬の味」を忘れようとしている。ほんのひと昔前までは、春のホーレンソウ、夏のナス、キウリ、秋のカブ、冬の大根と、季節感があつたが、いまは真冬の店頭でスイカやイチゴが売られていたり、キウリやトマトが一年中食べられたりと、季節感がなくなっている。

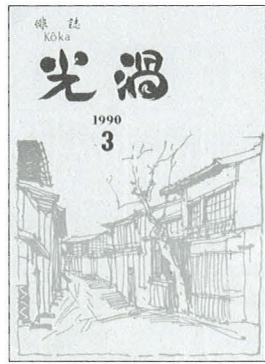
魚を例にとつていふと、秋から冬にかけての寒ブリや戻りカツオは、たっぷり脂がついていて、これを冬に食べると、寒さに耐えられるだけの脂肪やカロリーがちゃんと取れる仕組みになっているのである。

どんな食物にも「旬」があり、季節の恵みを食ふといつことは、からだにとつてもいちはん自然で、味も栄養も「旬」こそほんものなのである。

幸い高知では、長い伝統を持つ日曜市に、そんな「旬」を感じさせてくれるものが残っているのが救いになる。

三〇〇号近し
久松かつ子

主宰・片岡富藏・久松西子・久松かつ子三代の「純粹に俳句を愛するものは自由を集めて研鑽しよう」という呼びかけで、平等の同人制・自選作品発表の俳誌として、現在隔月発行を続け、来年平成三年には三〇〇号を迎えることになった。



ここに集まる同人は、それぞれの作風を推し進めることで、統一された主義・作法は無いが、生活者の哀歎・美学の最大公約的な合意のもとで、熱心に文芸にたずさわる者の好意の集団である。右か左かと、極端に区別されやすい高知県の土地柄の中で、「光渦」は主宰が「あざみ」系ではあるが、同人各自は高知俳壇の中道にあると認識しており、中央俳壇と同じく中道を必要と考える。

「光渦」は、森田竹千代(元・高知俳連事務局長、俳誌「夏爐」光渦総務)岡本歩城(元・高知俳連事務局長、同現俳句ポスト長、俳誌「夏爐」、光渦編集長)、三宮たか志(高知俳連会報編集長、俳誌「狩」、高知支部長、光渦「土曜会」運営

若い人の参加を
川竹 松風

川柳高知は、昭和三十四年六月一日創刊で、一度の欠号もなく今年四月で三百六十三号を累ねた。毎号、同人・誌友を含めて九十名前後が作品を発表している。

(平成元年度黒潮賞作品)
尾崎ゆきえ
土に生き土の心を知る素足
矢野須磨子
可能性針の穴にも賭けてみる
(同人作品)
曾我部佳風

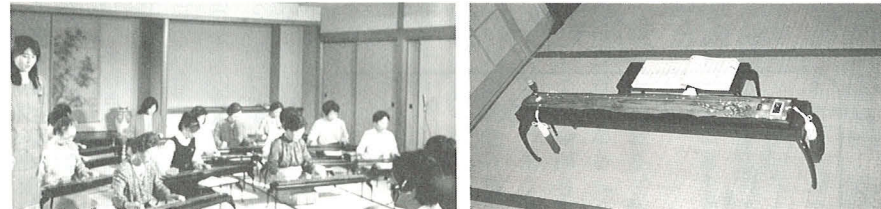
万才のお手の高さも戦中派
窪田 和弘
天敵が心の中にいた油断
中内 朱坊
忙中の閑を貰った風邪薬
西村 信子
(三十周年記念大会の秀吟)
父の書架父の教えが溜めてある
松山 淳枝
勝気さも涙もろさも母に似る
小野 康子
はるばると身内が揃う悲しい日
宮本 時彦
国賓へ天皇さんの背が低い
寺内 義晃

土佐の一絃琴
野村 敏子

一絃琴の起源は古く、平安の昔にはじまる。藤原の行平が須磨に謫居していた折、流れついた舟枝を拾い、冠の緒を張り、岸辺に生えていた芦の管を指にはめて弾いたという。

これを須磨琴といい、須磨の曲という名曲がある。古事記、古今和歌集の曲など多い。

幕末から明治にかけて、門田宇平により土佐に伝えられ、島田勝子から秋沢久寿栄の代になって、昭和二十五年白鷺会を結成、稲垣積代から現在の野村敏子へと受け継がれている。



コンクールを終えて
—の宮咲子

先月六日、第八回四国バレエコンクールが高知県民文化ホールで開催され、児童よりシニアまで、四国内の九十名のバレリーナ達が日頃の成果を競い合いました。

一の宮バレエも、三年振りのコンクール参加で、私もスタッフとしてお手伝いさせていただき、子ども達のテクニックや表現力のレベルアップに驚嘆し、「十年ひと昔」ではなく、「三年ひと昔」を実感させられたことでした。それと、今回も一つ感じたことは、審査基準が当初とは少しずつ変わり、アカデミックで、よりアーティスティックなものを育てようとする方向です。

私も、昭和四十七年に研究所を開設して、十数年来、短期間ずつではありますが、ヨーロッパのバレエ学校に学び、その都度、考えさせられたことは、日本でのバレエ指導は「未完成な基本の上」、早く踊るテクニックを載せてしまっている」ということでした。そのことに疑問



委員)の三名が主宰を補佐する。

近く二〇周年を迎える「高知県俳句連盟」略称「高知俳連」には、故・久松西子主宰の時代に事務局を提供するなど、その後、文化行事への全面協力体制が歴然としており、各種の受賞歴も「光渦」同人に多数記録されている。それらはやはり中道の大切さであろうと思われる。

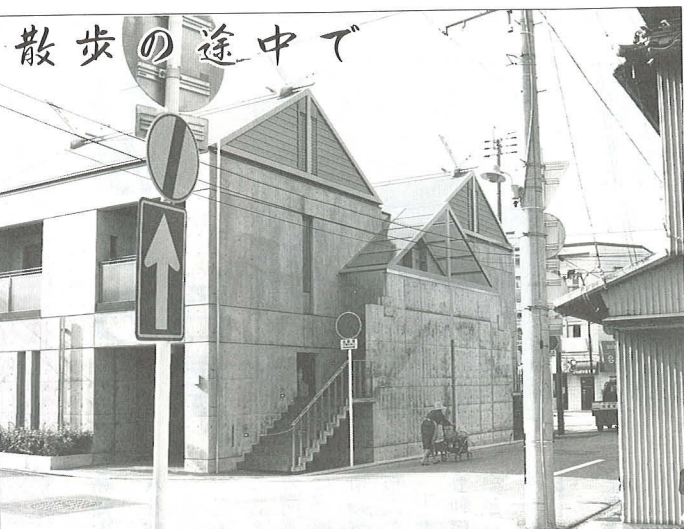
発行所・高知市上町三丁目四十一
発行者・久松かつ子
電話・〇八八八―四四―三三七七自宅
文責・三宮たか志

幸せな夫婦財産などいらぬ



平成元年度12カ月合冊本

発行所 高知市大川筋一―三二二五
高知川柳社
電話 〇八八八―三二―二五八一



寿町3丁目、「神道大教高知中教院」の建物がある。都市美デザイン賞にも推薦されたコンクリート打ちはなしのモダンな外装と、南北の階段中頃に左右対象に配置された狛犬のコントラストがおもしろい。裏手には江の口小川が流れ、近くには大川筋の武家屋敷や、薫的神社もある。

風伯

隆盛のかげの貧困

時代とともに消長があるのはなにも文化にかぎらないが、戦後から昭和三十年代にかけて、地方文化の黄金時代が築かれていた。文化国家の建設の息吹が横溢するなかで、文化人、知識人といわれる人々だけでなく、文化が大きなひろがりとなり高まりをもって推進され

た時代であった。

そうした高まりがやがて鎮静化していったのは、思い返してみると昭和三十年代後半からの高度経済成長期にはいつてからで、大量生産、大量消費、大量消費に象徴される物質生活の謳歌とともに、熱気が薄れ、創造的取

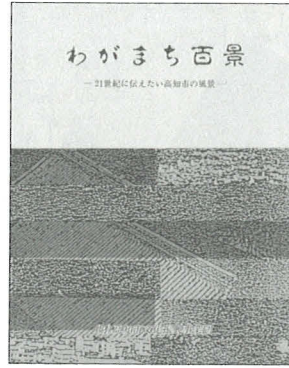
り組みが弱まり、文化活動のなかがみも瘦せ細っていったように思う。

そして今、また文化の時代だという。「もの時代の心から心へ」といわれるように、たしかに文化への関心は高まっている。

各地で美術館、博物館、記念館、文学館、資料館、歴史館などと、多様な文化施設の建設が盛んだが、ある調査によると一昨年の一月から昨年初夏までの一年半に全国で建設されたものをあわせると、八十五館に達するそうだ。さらに引き続き建設される計画が一一〇館ちかくあるということだから、まだまだ文化施設の建設ブームは続く勢いだ。

だがどうもすつきりしないのは、これほどに施設がつくられながら、一向に熱気が伝わってこないことである。現象の隆盛のかげに、抜きさしならぬなにかの貧困だけがやたら目につく時代である。(華)

わがまち 百景



高知市文化振興事業団編

A5変型 二二四頁 定価一、二〇〇円

二十一世紀に伝えたい、高知市民のこころの拠り所となっている風景を百カ所選定、百人の随想と写真で紹介した。様々な視点からとらえられた高知市の姿は味わい深く、高知市の誇り、市民の共有財産ともいえよう。

本書は、散歩のガイドブックとしても利用できる、こんなところがあったのかという、高知市を再発見する楽しみも味わえる書となっている。

流れと波の 科学



上森千秋著

A5判・二四〇頁 定価一、五〇〇円

近年、高知の海岸から砂浜が消えていくのは何故なのか、等々、人間生活に不可欠のものである水が、われわれの周りでどのような運動をし、どのように働いているかを、川と海の営みを通じて、平易な理論で説いた。

高知大学名誉教授（農学博士）である著者は、高知県や建設省・運輸省の各種委員会委員を務めており、まさに第一人者の手による格好の書。

高知県方言辞典

土居重俊・浜田教義編

A5判・七三六頁 定価六、一八〇円

古語から現代語にいたる土佐言葉約一万四千語について、意味と成り立ちを解明、例文と注釈を加えた土佐方言の集大成。

土佐の芸能

高木啓夫著

B5変型・三四六頁 定価四、九四四円

現在に遺る土佐の民俗芸能の姿を探求収集し、それぞれを神楽・獅子舞・花取り踊り等十五項目に分類、詳説を施した。

土佐自由民権資料集

外崎光広編

A5判・三四四頁 定価三、〇九〇円

土佐自由民権の基本的資料を事件別に分類・収録し、原資料により各々の事件の実態が把握できるように編集した資料集。

土佐日記

土居重俊著

A5判・一八八頁 定価一、八〇〇円

標準語と土佐方言による全訳を付し、注解のほか土佐方言を援用した合理的な解釈を施すなど、土佐日記研究の決定版。

明日を創る

大谷英二著〈高知レポート1〉

A5判・一二六頁 定価一、〇三〇円

高知のまちづくりに関する十一分野の代表的な十七の計画・提言を取り上げ、その課題等をダイジェストにして解説した。

いかにすれば都市の 河川はよみがえるか

今井嘉彦著〈高知レポート2〉

A5判・二〇八頁 定価一、〇三〇円

病んでいる都市河川を回復させ水質浄化と水辺再生へ向かわせる方策を、豊富な資料と具体例を基に提言としてまとめた。

土佐の自由民権運動

外崎光広著〈高知レポート4〉

A5判・一五六頁 定価一、〇三〇円

土佐自由民権の発生要因から先駆的役割までを体系的に明らかにした、従来の自由民権研究に一石を投じる画期的な書。

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町五丁目二番三号

TEL(〇八八八)③四三六五

郵便振替 徳島8-14869